

## 第12章 インダストリー精神と真空恐怖

驚 田 清 一

1

「勤勉」というメンタリティについて、あるいは「がんばる」という習性について、考えてみたい。つまり、何もしていないことがゼロではなくて、だらしない、なまけものといったマイナスの評価を受けるのはなぜか、という問題である。

これは、ゼロがプラス、マイナスの中間にある水準線であるという考えをとらずに、何かをしているということ（つまりはプラス）を評価の基準とするという考えを自明のこととするようなある思考法を前提としている。考えてみれば奇妙なことではある。ここで何かをするというのはたぶん、何かを一所懸命におこなうこと、何かに熱中すること、何かをごく几帳面におこなうこと、それをあたりまえとするような心性からみられている。いいかえると、ここで何かをするというのは何かを産みだすということと等置されているのであろうが、在るということと産むべくあるということとが等置されるとは、やはりどこかビョーキのように思われてならない。

いちばんわかりよいのは、二宮尊徳の例であろう。『報徳記』（富田高慶記述）に描かれているところによれば、尊徳は幼少の頃、芝刈り、薪伐り、縄ない、わらじ作りをするかたわら、つねに『大学』の暗唱につとめたようで、「歩きながら大きな声で読み上げるので、人びとはあやしんで、あの子は頭がおかしいのではないかという人もあった」という。労働時間のみならず、余暇をも効率的に使おうというだけならまだいい。ここでは余暇のみならず、労働時間中に他のことをもしようというまでに、自己への要求はエスカレートしている。「三回開発しなければ真の田畑とは言えない」というのも、同じ心性に発するものであろう。

「勤勉」(industry) ということが、おそらく強迫的なメンタリティとして、尊徳にかぎらず、わたしたちのうちで一般にはたらいてきたのであろう。勤勉、そして儉約、禁欲、忍従、孝行、正直、早起き、粗食……。

あるいはこれを、執着気質、つまりは感情の過度の緊張が持続する傾向なるもの（たとえば集中性や強い義務感、徹底性など）に帰するひともいる。たとえば東アジアの田んぼの風景、隅から隅まで田んぼを四角で区切ってゆく、あの強迫反復。ここには水田からの広さやそこからの収穫量を計算するための工夫ももちろんあろうが、あの四角の緻密さをみていると、とてもそれだけのこととおもわれない。過剰なまでの緻密な反復、そこには緻密さや規則性へのフェティシズム的な感受性がはたらきだしているような気がしてならない。

真空恐怖とか真空嫌悪 (horror vacui) とむかしから呼ばれてきたあの心性にこれに関係づけることはできないだろうか。自然現象はどのようなばあいにも真空の出現に反対するよう

に、あるいは真空の存在を否定するように、進行するという、西洋で古くからいわれてきた考えである。これはボートの進行の説明からトリチェリの真空実験にまでそういう解釈は適用されてきたといわれたし、さらにこれを拡張して、西洋絵画における余白が一つもないよう画面を絵の具で埋めてゆくあの強迫的なまでの心性につなげることもできるであろう。が、この真空恐怖という心性、さらに尖端、広場、閉所、不潔、赤面などを恐怖する心性とならべて考察することはできないだろうか。生活時間をいつも何か意味あることで満たしておかないと不安にかられるような心性としてである。

このような意味からすると、マックス・ヴェーバーも引いていたあのベンジャミン・フランクリンのいう「タイム・イズ・マネー」のエートスもなかなか興味深いものにみえてくる。そこでこの、時間の感覚と価値の感覚とを近代的なかたちでむすびつけたともいえるこの心性について、つぎに見ておこう。

## 2

ヴェーバーが「倫理的な色彩を帯びた生活原則」としての「資本主義の〈精神〉」をそこに読みとったフランクリンのことばとは、こういうものである。

時間は貨幣だということを忘れてはいけない。一日の労働で一〇シリング儲けられるのに、外出したり、室内で怠けていて半日を過ごすとしたら、娯楽や懶惰のためにはたとえ六ペンスしか支払っていないとしても、それを勘定に入れるだけではいけない。ほんとうは、そのほかに五シリングの貨幣を支払っているか、むしろ捨てているのだ。

信用は貨幣だということを忘れてはいけない。だれかが、支払い期日が過ぎてからの期間中にそれでできるものを彼から与えられたことになる。もし大きい信用を十分に利用したとすれば、それは少なからぬ額に達するだろう。

貨幣は繁殖し子を生むものだということを忘れてはいけない。貨幣は貨幣を生むことができ、またその生まれた貨幣は一層多くの貨幣を生むことができ、さらに次々に同じことがおこなわれる。五シリングを運用すると六シリングとなり、さらにそれを運用すると七シリング三ペンスとなり、そのようにしてついには一〇〇ポンドにもなる。貨幣の額が多ければ多いほど、運用ごとに生まれる貨幣は多くなり、利益の増大はますます速くなっていく。……

(『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳より)

M・ヴェーバーがここに読みとったのは、「自分の資本を増加させることを自己目的と考えるのが各人の義務だという思想」である。たえず価値を増殖させねばならないという強迫観念、あるいはさらに一般化して解釈することが許されるとすれば、いつも何か意味のあることをしなければならないという強迫観念のことである。

こういうインダストリー（勤勉・勤労）の精神は、フランクリンよりもさらに古く、ジョン・ロックもまた称揚していたものであって、ロックはかの『統治二論』においても、インダスト

リーということを浪費の禁止とワンセットで強く推奨していた。たとえばロックは物件をめぐる個人の所有権に三つの嚴重な制限を加えているが、そのうちもっとも重要な制限は、ひとは腐敗させるなどしてその価値を滅失させずに使用できるものだけを所有する権利をもつというものである。そしてこの制限について次のように述べる。「じぶんの正当な所有権の限界を超えたかどうかは、その財産の大きさによるのではなく、何かがそこで無益に滅失させられたかどうかによる」というのである。この制限条件が主としてターゲットにしているのは備蓄家ではなく浪費家であり、浪費の防止こそがここでは説かれているといわれる。

ロックとともに、労働は、たんに所有にたいする最終的な権利根拠のみならず、それを超えて「価値ないしは富の源泉」を意味するようになったといわれる。「世界を人間に共有のものとして与えた神は、同時に、生活上の最大の利益と便宜とに資するようにそれを利用すべく、人間に理性を与えたのである」とか、「あらゆるものに価値の差異を生じさせるのはほかならぬ労働である」といわれるように、財はつねに増大すべき動態的なものとされ、そうしたより多くの価値ないしは富を生みだすものとして労働が称揚されているのである。ロックにおいて、より多くの価値ないしは富といわれるときのその多さ・豊かさ (plenty) について、レオ・シュトラウスは次のように解釈している。「真の豊かさは、個人がみずから使用しうる限度以上に専有するための誘因をもたなければ、生みだされはしないだろう。勤勉で合理的な人たちでさえ、彼らの所有欲 (amor habendi) が、それ自体として有用なもの、たとえば肥沃な土地や役立つ動物、それに便利な家屋のようなもの以外の、他の対象をもちえないかぎり、初期の人間を特徴づけたあの活気のない怠惰へと逆戻りするであろう。……真の豊かさを生みだす労働へと向かわせる誘因は、獲得欲——使用しうるより以上のものをもとうとする欲求であり、これは貨幣の発明によって存在しはじめるのである」、と。

そしてここにおいて、神によって与えられたこの身体の作業をつうじて新しい価値と富とを創造すべく命じられているという要請、つまり「怠惰で無分別」(lazy and inconsiderate) であるのではなく、「合理的で勤勉」(rational and industrious) であれという要請が、「勤労」(industry) の精神、ヴェーバーが指摘したあの資本主義のエートスとしての「勤労」の精神へと転位するのである。合理性と勤勉はこうして能率性と累進性へと収斂してゆく。そしてその「勤労度の差」(different degrees of industry) によって各人の財の不釣りあいも生じてくるのであるから、結果として所有量の不平等も是認されることになる。そしてそういう個人的所有を、維持・保存するのではなく、むしろみずから無制限に増大させる権利を獲得し、たがいに保全しあうためにこそ社会は存在すべきであると、ロックは考えたのだった。

こういう心的エートスが、人間の活動はたえず価値を生産しなければならない、それもつねにより多く、より速やかに、つまりはより効率的に (!)、という強迫観念を生みだしてくる。ここではわたしたちの日々の行為が、何らかの価値を生産する活動として規定され、その合理性が効率性を基準として規定される。この論理が、わたしたちがつぎに述べるような〈前のめり〉の時間意識と強く結びつくとき、あの「時間は貨幣である」という言葉がもつ「道徳的訓戒」としての含みがあらわになるのであり、時間を無駄に使用することを一つの損失として意識させるような一種強迫的な心性が発生するわけである。時間の空白は埋められねばならない、

しかも意味と価値のあるものによって、という、西欧社会（とりわけ物理学や絵画の世界）にかつて根深くあった《真空恐怖》にも擬せられるような神経症的な意識が、生みだされることになるのである。

わたしたちの手帳のスケジュール表はたぶん、そのもっとも象徴的な戯画であろう。手帳の不安、それを引き起こすのはスケジュール表のなかの空白部分である。埋められていない空所を一つ一つ埋めていくことで、わたしたちのころは落ちついていく。忙しくなることがわかっていても、ぎりぎりまですきまを埋めていくのである。ページを黒く埋めることで安心するのである。が、スケジュールが詰まっているということを、多くのひとは、他人に認知され、他人に必要とされていることと勘ちがいしている。だから、いくら空白を埋めても、不安は消えない。というのも、いつ仕事か途切れ、空白ができるかわからないからである。だからいくら予定が詰まってきたり、じぶんから減らすのはこわい。まさに《真空恐怖》にも擬せられうる空白への恐れである。分厚いビジネス手帳が、わたしたちのころを癒すのである。あるいは、母親が作る児童のための時間割。そこに浸透している神経症的意識が、子どもたちを囲い込む。ついでに言えば、これは、平地だけではなく、どんな急な斜面であっても、たとえわずかで田畑に作り変える可能性のあるところは耕す、しかも憑かれたようにきちんと矩形に、という、あの農耕社会の執着気質にどこか結びつけて考えることもできるかもしれない。

予定がいっぱいでふさがっていること、つまり多忙（busyness）が、仕事や商売、事業という意味でのビジネス（business）のひとつの本質である。busyとはもともと「手がふさがっている」という意味で、ドイツ語でも、予定がいっぱい詰まっていた暇がない状態を besetzt（ふさがっている）という。わたしたちは「ゆとり」の必要を主張するときにすら、それを事業企画にすることをまず考え、そのための企画文書を必死で作成するという哀しい性に、とことん浸食されていることは言うをまたない。

さて、こうした〈インダストリー〉や〈ビジネス〉の感覚をつらぬいている一つの時間感覚がある。それをわたしたちは〈前のめり〉の時間意識、あるいはプロスペクティブ〔前望的〕な時間感覚と名づけてみたい。プロスペクティブ（prospective）ということばは、prospicere〔前方を見る〕というラテン語の動詞から派生したものだ。この prospicere は、pro という「前方」を表わす接頭辞と、specere という「視る」を意味する動詞との合成語である。pro ということばで表示されるこの〈前のめり〉の時間意識は、近代の社会経営をめぐるさまざまな場面に浸透しているものであって、たとえば近代の歴史観にとって本質的な意義をもっている「進歩」（progress）という観念や、産業資本主義における「起業」（project）という観念、さらには企業計画や計画経済における「プログラム」（programme）という観念などというふうに、この接頭辞はひじょうに多角的にもちいられている。とともに、近代社会を生きる人びとの生活意識をひじょうに深い部分にまで規定してきたエートスでもある。

pro ということばで表わされるこの〈前のめり〉のかまえを、わたしたちの時間意識のなかからもう少し細かく取りだしてみるならば、それはまず第一に、《進歩》という理念のなかに象徴的に現われている啓蒙主義的な発想と不可分である。それは、知識の増大、真理への接近、合理性の開花、道徳性の向上生産力の拡大、貧困からの解放というふうに、さまざまな文明的

価値が人間の歴史のなかで累進的に増大していくという時代感情、つまりは、より良い未来に向けていま前進しつつあるという歴史感覚と、深くかかわるものである。ちなみに、《進歩》を意味する英語のプログレス (progress) は「前に (pro) + 進む (gradior)」というラテン語の動詞から派生したことばである。この《進歩》は、1970年の大阪万博のメイン・テーマ「人類の進歩と調和」まで、近代という時代の一貫したスローガンでありつづけてきたのであって、事実、《進歩》は「文明開花」や「近代化」という観念の下敷きにもなっている。

こうした〈前のめり〉の時間意識は、第二に、《プロジェクト》という観念と結びついている。project は、ラテン語の pro-icere、つまり「前に+投げる (iacere)」という動詞からきていることばである。ところで資本主義的な企業は、このプロジェクト (起業) とともにもう一つの pro-にかかわる。《プロミス》である。「約束」(promise) というのは、ラテン語の promittere、つまり、「前に+送る (mittere)」という動詞からきていることばである。約束手形というのは、まさに決済が将来に先送りされる手形のことだ。これは一方で、たえず次の課題へと欲望を駆りたてる企業のメカニズムであり、未来の決済を前提に現在の取引がおこなわれる資本主義社会の論理であるとともに、他方で、個人の同一性とその正当性の根拠は個人の出自ではなく、彼が将来に何をなし、何を達成するかにかかっているという近代の市民社会の論理であり、市民的自由の論理でもある。そのように企業においても個人においても未来における決済 (プロジェクトの実現や利益の回収) を前提にいまの行動を決めるという意味では、ひとに〈前のめり〉の未来志向の姿勢をとらせる。つまりプログラムをたえず未来に向けて投企させるわけである。

そこで第三に、そういう《プロジェクト》の物語を反転すると、他人に、あるいは社会に、遅れてはならないという、わたしたちを恒常的におそう強迫的な意識になる。他人よりも劣ること、遅れることを、致命的な傷と感じ、自己のアイデンティティの消失とを感じるからである。そしてより速くと、ますます焦る。少し遅れただけでも、ひどく不安になる。これは、人間の活動というものは価値を生みだすべきものであるから、より多くのものをより速く、より効率的に産出していかねばならないという、資本主義のエートスの基底にある思考法であり、ベンジャミン・フランクリンが強調していたように、たんに価値を生みだすだけでなく、より生産的な未来に備えるという、目的性のある生産をしなければならないという思考である。そのフランクリンが述べ、近代社会の標語のようになったことばに「時間は貨幣である」があるが、ここに、未来に価値を生みだすものをこそ作らねばならない、生産性が累進的に増大していかなければならないという、そういうドライブを育む資本主義のエートスが象徴的に含み込まれていることを指摘したのが、先にもふれた『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』におけるヴェーバーだった。そのエートスとは、何もしないで時間を空虚にしておくこと、無為に時間を消費してしまうことを損失として考える、そういう感覚のことである。

さて、第四に、決済を未来に先送りする思考法の変奏として、いわゆる「青い鳥」幻想を挙げることもできるだろう。ここにあるのは、じぶんは未だ本来のじぶんに完全になりきっていないという感覚であり、現在ならば「〈わたし〉探しゲーム」とでもいうのだろうか、要するに「こうすればじぶんはもっとじぶんらしくなれるんじゃないか」という、じぶんをつねに本

来の「自己」にいたる途上にあるものとして意識する心的メカニズムであり、そういうかたちでじつは欲望をどんどん再生産していく装置である。じぶんの存在がひどくたよりなく感じられるとき、ひとはそういう不安をかき消そうとして、もっとじぶんがじぶんらしくいられる場所がないかと夢みはじめる。別のところへ行けばもっとちがったじぶんになれる、ここでは不可能な幸福に出会えるという幻想を追いはじめるのである。前世紀から今世紀のはじめにかけて、たとえばボードレールの散文詩「この世の外ならどこへでも」(『パリの憂鬱』)が、カール・ブッセの詩やメーテルリンクの戯曲『青い鳥』が、こうした幻想を象徴的に描きだした。そして現代では、この幻想が「じぶんらしさ」とか「ほんとうのじぶん」、あるいは「個性的なライフスタイル」などといった標語となって、華やかなコマーシャルイズムの世界からわたしたちの不安なところに語りかけている。ここではひとつ、ボードレールの詩を引いておこう。

この人生は一の病院であり、そこでは各々の病人が、ただ絶えず寝台を代えたいと願っている。ある者はせめて暖炉の前へ行きたいと思い、ある者は窓の傍へ行けば病気が治ると信じている。

私には、今私が居ない場所に於て、私が常に幸福であるように思われる。従って移住の問題は、絶えず私が私の魂と討議している、問題の一つである。

「私の魂よ、答えてくれ、憐れな冷たい私の魂よ、リスボンヌへ行って住めばどうであろう？ あそこはきっと暖かだから、お前も蜥蜴のように元気を恢復するだろう……(中略)」

私の魂は答えない。

「お前は、運動するものを眺めながら休息するのが、それほど好きな性分だから、和蘭へ行ってあの至福の土地に住みたくなかないか？……(中略)」

私の魂は黙っている。

「バタビアの方が更にお前の気に入るだろうか？ あそこでは、熱帯地方の美と融合した、欧羅巴の精神が見られるだろうが。」

一言も答えない。——私の魂は死んだのだろうか？

「それではお前は、もはや苦悩の中でしか、楽しみを覚えないまでに鈍麻してしまったのか？ もしそうなら、いっそそれでは、死の相似の国に向って逃げだそう……。憐れな魂よ！ 私が総てを準備しよう。ボルネオへ旅立つべく、我らは行李を纏めよう。そしてなお遠くへ、バルチックの尖端へ赴こう、更になお遠くへ、出来るなら、人生から遠ざかって、我らは極地へ赴こう。……(中略)」

終いに私の魂が声を放ち、いみじくも私にむかってこう叫んだ、「どこでもいい、どこでもいい……、ただ、この世界の外でさえあるならば！」

(三好達治訳『巴里の憂鬱』より)

そして最後に、前望的な時間感覚は、「新しいものはみなよい」(omnia nova placet) というネオマニーの感覚にもつながっている。欲望の対象をたえず交替させることで欲望そのものをたえず再生産してゆく、そういう意味装置に対応するような感覚であって、これはあらゆる



ものを商品化し、それに「新しい」という様態（モード）を付与していくファッションのいわゆる「現在主義」とも深く関係している。ファッションにおいては、最終的には前のシーズンと異なるというただそのことだけが重要であって、そこからロラン・バルトは、モードとは「無秩序に変えられるためにある秩序」だとか「意味をけって定着させることなしにしかも維持していく機械」と規定したのだし、さらには、「モードはこうして、〈みずからせっかく豪華につくり上げた意味を裏切ることを唯一の目的とする意味体系〉という贅沢な逆説をたくらむのだ」という、きわめてアイロニカルなことを残したのであった。ちなみにリトアニアの町、ケーニヒブルクから生涯一度も外へ出ようとしなかった18世紀の哲学者、イマヌエル・カントも、流行のエッセンスが「新奇さの魅力」にあることを見抜いていた。

## 4

さて、こういう〈前のめり〉という意識をかりたてるためには、ひとはまず来るべき未来とそこから離れつつある現在とを、あざやかに対比する必要がある。とともに現在が現在からあざやかに離脱するためには、過去とはっきりと断絶していることの確認も必要であろう。それによって始めて、わたしたちの意識は現在という時間の「際」に集中するようになるからである。「いま」というものを先鋭化する感受性をもし現在主義とよぶならば、そういう現在主義をもっともきらびやかに煽るのが、高度消費社会の心的装置、つまりはモードという現象であろう。ゲオルク・ジンメルによれば、モードこそ、「来ること」と「行くこと」との、「発端」と「終焉」との差異をできるかぎり際立たせる分け目の点、そこに現在という時があり、何かが終わり代わって何かが始まるという、そういう境界としての瞬間にいまいるという感情を、もっとも強力に煽るものなのである。それが現在を、時間の「際」として浮き立たせるのは、そこで何かが終わり、別の何かが始まるという意識を喚起することによってである。現在という時点が、始点と終点、発端と結末とをもつ「強い」物語を背負っているふりをするによってである。

近代の生の特殊な「性急な」テンポは、生の質的内容の急速な交替への憧憬ばかりではなく、発端と終焉、来ることと行くことという限界の形式上の刺激の強さをも語っている。このような形式のもっとも簡潔なものにおいては、流行は、一般的な普及への傾向と、ほかならぬその普及がもたらすその意味の消滅とのあいだの蕩揺によって、限界の独特な魅力、同時的な発端と終焉の魅力、新奇さの魅力と同時にその儚さの魅力をもつのである。流行の狙いとするところは存在か非在かではなくて、同時に存在であり非在であることである。流行はつねに過去と現在の分水嶺に立ち、そうすることによって、流行が栄えているかぎり、他の現象には稀にしかないほどに、強烈な現在の感情をあたえる。

過去からきっぱり切断される「分水嶺」としての現在に対し向けられる鮮やかな感情、この感情はおそらく、現在を過去の連続がここで断ち切れるぎりぎりの瞬間として捉える歴史意識と無関係ではない。これを裏返していえば、前のめりの「いま」がつねにフロント（最前線）

として現象するということである。政治についてと同様、ファッションについての前衛（アヴァンギャルド）がいわれるゆえんである。

このようにして、生活にたいするわたしたちのかまきは、総体として前方を向いている。経済や科学も、政治意識や生活世界における道徳的感受性（エートス）も、そしてメディアが流通させるファッション・イメージも、未来のはじまりとしての現在の意識、pro という〈前のめり〉の意識に深く浸透されているのである。そしてこの全過程は、労働についてのわたしたちの近代的な理解のしかた、労苦としての仕事のとらえかたと深く結びついて、社会にあまねく定着していたのであった。

## 5

わたしたちの労働の場に深く深くしみ込んだインダストリー精神、それが含みもつ病理について、わたしたちは時間感覚という視点から分析してきたわけだが、稿を閉じるにあたって、もう一点、現代の労働がおかれているアイロニカルな状況としてどうしても指摘しておきたい問題がある。それは、こんどは時間ではなく、空間という次元をめぐる問題である。

労働の近代化過程は、家庭内でなされるべきことがらを家庭外へどんどん押しだしてきた。炊事は外食産業へ、洗濯はクリーニング業へ、出産・死亡と病人の世話は病院に、糞尿処理は衛生局に、家庭学習は塾や予備校に……といったぐあいである。そこで一つの例として調理という場面をとりあげるならば、この調理というとなみにいま、奇妙なことが起こっている。

独身のひとたちにかぎらず、料理をしないひとが増えてきたというのは、正確な数字情報はもっていないけれども、コンビニエンス・ストアやデパートの地下の食料品売り場、あるいは夜の居酒屋などの風景を見るかぎり、どうもたしかな事実のようである。昼休みともなると、みずから調理したお弁当を開けるひとはさらに少なくなる。ほとんどのひとが社員食堂に行くか、ほかほか弁当を買いに行く。パンやスナック菓子ですませるひとも少なくない。

他方で、テレビをつければ、朝から晩おそくまで、料理番組やグルメ番組がずらっと並んでいる。ワイドショーがめじろ押しの「主婦」の時間帯には、料理番組がもともと多い。が、最近「料理の鉄人」や「チューボーです」のように、深夜11時をまわってからの、それもたっぷり時間をとった番組が増えている。料理のレシピを伝えるというより、あきらかにゲーム感覚のショーといったかんじである。それに、ふだんとても手に入らないような食材を使っている。つまり視聴者があとで作るであろうことは計算に入っていない。そしてそれで番組がなりたっているということだ。

作らないということは、食事の調理過程を外部に委託するということだ。調理を家の外にだすということ、そのことの意味は想像以上に大きいようにおもう。たしかに、むかしは調理も公共の場で、たとえば露地の共同炊事場でおこなわれることが多かった。それは戦後の20年くらいまではふつうの光景だった。その後料理の仕事は「マイホーム」に内部化されたのだが、現在ふたたびその過程が、わたしたちからは見えない場所に移動させられつつある。それはちょうど、かつて排泄が野外や共同便所 でなされ、汲み取りもわたしたちの面前でなされていたのに、下水道の完備とともに排泄物処理が見えない過程になったのと同じことである。



先にも少しふれたように、それとほぼ並行して、病人の世話が病院へと外部化された。出産や死という、人生でもっとものびきならない瞬間も家庭の外へと去った。家で母親のうめき声を聴くことも、赤ちゃんの嘔きだすような泣き声も聴くことはなくなってしまった。いや、じぶんの身体でさえ、もはやじぶんでコントロールできず、体調がすぐれないときには、すぐに医院にかけつけるしまった。自己治癒、相互治療の能力はほぼ枯渇した。その点で、身体はもはやじぶんのものではない。

誕生や病いや死は、人間が有限でかつ無力な存在であることを思い知らされる出来事である。おなじように排泄も、じぶんがほかならぬ自然の一メンバーであることが思い知らされるいとなみである。そういう出来事、そういういとなみが、「戦後」という社会のなかで次々に外部化していった。そして家庭内にこのこされたそういう種類の最後のいとなみが、調理だった。ひとは調理の過程で、じぶんが生きるために他のいのちを破壊せざるをえないということ、そのときその生き物は渾身の力をふりしぼって抗うということ、身をもって学んだ。そしてじぶんもまたそういう生き物の一つでしかないということも。そういう体験の場所がいまじわりじわりと消えかけている。見えない場所に隠されつつある。このことがわたしたちの現実感覚にあたえる影響は、けっして少なくないとおもう。

調理の過程が自然との接触のもっとも基本的な場面だとしたら、ボランティアという、他の人間とのごく基本的なかわりの場面で、調理という仕事のシンプルなリアリティをあらためて再発見するひとも増えているようにおもわれる。しかしこのことは、現在の社会のなかで、家事という無償の労働のなかにも、勤務という有償の労働のなかにも、〈仕事〉のもっともポジティブな面が確認しにくくなっているという事実をこそ意味しているのではないだろうか。働くことそのことが、ひとびとにもっとも深い充足感をあたえるような生活のありかたというものを、「戦後」も50年を過ぎたいま、あらためて構想しなおす必要がありそうだ。

※ 本稿は、本研究会の進行過程とほぼ並行して執筆した拙論『だれのための仕事——労働 VS 余暇を超えて』（岩波書店・21世紀問題群ブックス9）、ならびに「外部化された料理——〈働く〉ことの意味をいま問いなおす」（「公明新聞」1996年4月27日、30日）の記述と、一部重なっていることをおことわりいたします。